

# JWOC 2001 日本代表選手紹介

今年のジュニア世界選手権大会(JWOC2001)は、7月9～15日の日程でハンガリーで開催される。29ヶ国から317名がエントリーしており、競技はショート(予選、決勝)、クラシック、リレーが行われる。日本からの代表選手は以下の男女各6名であり、4月30日に男子49名、女子20名という過去最大人数の選考会で全国の若手精鋭の中から選ばれた。

今回の女子は、昨年のJWOC2000に引き続いて2回目の出場になる澤田を含めて、早生まれの現役3年生が多いのが特徴であり、そういう意味では結果を残したいところだ。2005年に日本で開催される世界選手権に向けて若手の台頭が望まれるところだが、今回の男子は久しぶりに高校生が一人メンバーとなった。この中から次世代を担う選手が育って欲しいところだが期待を持って見守ろう。ここではまずその選手達を紹介する。

## <女子選手>

氏名	大学	学年	セレ順位	主な戦績
澤田留己	京都女子	卒	1	JWOC2000、ICS00 WE-FA 6位
石川裕理	京都	3	2	早大 W21A 7位、IC00 WE 9位
田島聖子	東京女子	3	3	千葉大 W21A 7位、全日本 W20E 2位
川島沙耶香	東京女子	2	4	千葉大 W20A 1位、早大 W20A 2位
浅井千穂	京都	2	5	ICS00 WF 3位
櫻井優子	宮城学院	2	6	IC00 WF 12位



### 澤田留己 (京都女子大学 卒)

メンバーの中で唯一のJWOC経験者である。昨年のインカレショートの6位入賞をピークにやや下降気味だったがセレクションは堂々のトップ通過。4月から社会人となったのでトレーニング時間を確保し持久力アップを図るのが当面の課題か。今年は「昨年の2/3の順位を目指したい」と意欲を燃やす

### 石川裕理 (京都大学 3年)

インカレショートこそ予選で飛んでしまったが、早大大会、愛知インカレ、全日本と非常に安定した実績を残している。3年で学業との両立など悩みは多いが「最後まで楽しむこと」を目標に、集中力を切らさない体力をつけて世界に挑戦する。



## 突然企画<村越真のオリエンテーリング日記> 5月5日

世界選手権のための合宿を途中で抜けて、秋田に向かう。この夏のワールドゲームズ(WG)の打ち合わせのためだ。「いつまでこんな生活続けられるのか」と思う状況で、かろうじて自分を支えているのは、世界選手権を目指しつつ、世界選手権に匹敵するイベントの長を努めた経験があるのは、世界のオリエンテーリングの歴史の中でも自分一人だろうという、他人からみたらちっぽけな自尊心だ。

スウェーデンやノルウェーのようなオリエンテーリング先進国では、こんなことは決して起こらない。人材も豊富で組織もしっかりしたそれらの国なら、同一人物が世界選手権級の大会の選手と運営を同時にこなすなんてことはありえない。これは自分の生活にとっても異常なことなら、日本のオリエンテーリングにとっても異常なことなのだ。

WGは、秋田市の海沿いにある飯島砂防林で開催される。93年の東京OLのO-cupの舞台になった場所だが、オーストラリア人のプロマッパーであるロブ・ブローライトの調査で見違えるような地図になった。しかし、2次調査をしている山川と羽鳥には評判がよくない。しゅく「暴力調査」。羽鳥なんか、「全然インチキ」と怒って二日ばかりで500m四方の調査を「やりなおして」きた。もっとも、ロブの調査にさんざん難癖をついた山川の調査にも、僕は調査と作図の時、悪態をつきまくった。「こんな地形ないじゃないか、バカヤロー」「なんだ、計曲線の間にコンターが3本しかないじゃないか、チキショー」。調査者っていうのは、自分以外の調査は気に入らないものだ。



田島聖子 (東京女子大学 3年)

昨年度後半に入ってから着実に伸びてきた選手である。東日本、千葉大で結果を出し、インカレ団体戦で1走3位という大活躍、さらに全日本はW20Eで2位入賞と上昇基調が続く。「世界のオリエンテーリングを見て来たい」と言うように早くも視点は世界に向いている。



川島沙耶香 (東京女子大学 2年)

インカレには参加していないが千葉大、早大で結果を出した。技術的にも体力的にも課題は多いが短期間に多くを吸収している。田島と共に東大OLKの中で切磋琢磨できる環境が何よりも嬉しい。



浅井千穂 (京都大学 2年)

昨年は大会参加も少なく目立たない選手だった。「満足できるレース」を目指してインカレ前から始めたトレーニングを継続している。石川と共にインカレチャンプの番場洋子が身近な先輩にすることは何よりも心強い。技術的課題も多いが飲み込みが早く着実にレベルアップしている。



櫻井優子 (宮城学院大学 2年)

宮城学院からは初めてのJWOC出場である。元気のよい同期の仲間と共にインカレでオリエンテーリングの魅力に取り付かれた。今までの実績は寂しいが「楽しめていることが成績に結びつくように頑張りたい」と意欲的な取り組みを見せている。これから伸びる1番手として期待しよう。

<男子選手>

氏名	大学	学年	セレ順位	主な戦績
山田高志	桐朋学園	高3	1	IH00 ME 1位、全日本 M20E 4位
北島聡之	東京農業	2	2	関東新人戦 2位、ICS00 MF2 2位
久野雄介	東京	2	3	関東新人戦 1位、ICS00 MF1 1位
堀江守弘	東北	2	4	千葉大 M21A2 45位、IC00 MF1 6位
後藤 崇	東京	3	5	筑波大 M21A1 15位、早大 M20A 1位
纒坂 尚	早稲田	2	6	筑波大 M21A1 15位、千葉大 M21A1 25位



山田高志 (桐朋学園 高校3年)

インターハイ連覇を果たした高校OL界トップの実力者で鹿島田二世の到来を期待させる。強豪が顔を揃えた全日本のM20Eで堂々の4位、セレモトップ通過と快進撃は続く。JWOCへの参戦は一つのステップに過ぎず、2年後の新人インカレチャンプ、2005年のWOC日本代表へと夢は大きい。

北島聡之（東京農業大学 2年）

先輩の田崎友康に誘われたのがきっかけでオリエンテーリングを始めた。後を追うように海外遠征を夢見て JWOC セレに挑戦、見事に2位通過を果たした。目標は「現状に甘んじないで常に挑戦的な姿勢でオリエンテーリングに臨むこと」。現在はまだ未知数だが遠征をきっかけに一変する予感も。



久野雄介（東京大学 2年）

関東新人戦で優勝、インカレショート MF1 で優勝を始め、参加した大会では確実に一桁上位に入る安定さを有している。トップ比 150% を目標に「代表の責任を果たしたい」と語る。自己分析はよくできているので後は準備を通じて自信をつけたいところだ。

堀江守弘（東北大学 2年）

スキ=0 の JWOC 経験者。目標は「ショート B ファイナル 30 位、クラシック 100 位」と明快。トレーニング計画も明確で、あとはフィジカル面の強みを生かした技術の習得が課題か。2005 年の WOC 日本代表へも照準は向いている。



後藤 崇（東京大学 3年）

JWOC へ行くことがここ2年間の目標だったと言う。月 200km のトレーニングを続けており準備不足を言い訳にしないと切り切る。目標は「1秒を争うような勝負をすること」だそう。

纒坂 尚（早稲田大学 2年）

早くから 21A クラスに出場し顕著な実績を残している。目標はトップ比 150% 以内でショートは B ファイナル。これからの2ヶ月は「飲みも絶対止めます」と宣言し万全を期す。



突然企画<村越真のオリエンテーリング日記2> 5月11日

昨年のWCのトレインで自主トレーニングをした後、新富士駅で山川と待ち合わせ。ワールドゲームズの併設大会の準備プランと予算プランについて意見交換をする。本来商売である彼に、併設大会は最低限の予算でやりくりし、利益を50万円だしてワールドゲームズの本会計の赤字を埋めることを了承してもらった。ワールドゲームズはオリエンテーリングの五輪入りにとって重要なステップである。その派手なステップも、現場で作業する人間の工夫や努力によって支えられているのである。



チームオフィシャルは以下の4名で  
選手12名と合わせて16名のフルエントリーとなる。



団長 尾上秀雄 男子コーチ 柿並義宏 女子コーチ 武藤拓王 女子コーチ 千葉あかね

スコード強化部  
JWOC 担当、サ  
ン・スーシ所属  
JWOC99 に引き続  
き2回目の遠征

東北大学OB  
Team 白樺所属  
ユニバー00

筑波大学OB  
OL 歴17年  
横浜OLクラブ  
所属

津田塾大学OG  
英国在住  
ユニバー95

突然企画<村越真のオリエンテーリング日記3> 5月16日

東奔西走の初日である。今日は夜名古屋で2005年世界選手権の準備委員会。そのまま落合宅に泊まって、翌日は浜松で工学部の駅伝大会。18日は東京で秋田のワールドゲームズの技術代表者会議、19日は恵那で合宿で、20日は京都でJOAの講習会である。現在は長野県知事になってしまった田中康夫氏は、仮名のアルファベットが足りなくなるほどの女性たちとの付き合いを描いた東京ペログリ日記で「まったく、こんな生活がいつまで続けられることやら。」と嘆いてみせるが、結局は「好き」だからこぞできることなのだろう。

世界選手権準備委員会では、東京からJOA副会長伊藤氏、事務局長の古賀氏がみえていた。一番問題になったのは資金面だ。伊藤氏は、資金集めのために協会員(各都道府県協会)に寄付のノルマを課すというから、「そんなことしたら、世界選手権への反感が高まるばかりですよ」と諫めた。「徳」のない組織は、力めば力めほど評判を下げちゃうのだ。今のJOAに必要なのは、その徳を回復することだと、伊藤氏も古賀氏も認識しておられるのだろうか。

5月20日

JOAのディレクター講習会で京都へ。ディレクター制度の危うさと移行措置のインチキさについて言いたいことは、いくらでもあるが、実際に講習会に出て、そのインチキさには失望すら覚えた。「また高い金とって、なんで新しい制度が必要なんだ」という声は大きい。それに本質的に応える方法はただ一つ、移行措置を容易にすることではなく、講習会を充実したものにすることだ。一部を除けば、講義には不満はない。だが、全体として組織が目標にしているかが見えないのだ。人間のモチベーションへの想像力が組織には欠けている。

ディレクター移行なんて止めようと思っていた僕が、考えを変えたのは、3月の全日本の影響が大きい。「これは放ってはおけない」。そう思う人が増えることは本来JOAにとっても望ましいことだ。あとはJOAにそれを受け入れる度量があるかどうかだ。そんな人間(多分僕だけでなく、その場に居合わせた多くの心あるひとたち)にとって、漫談のような講習を90分も聞かされることは苦痛以外の何物でもない。もっとも僕は漫談講義の間、半分以上眠っていたのだが。

京都駅そばの本屋で本を漁って、N嬢とデートをしてうさを晴らす。

5月30日

WGの打ち合わせで東京へ。18時から始めて、19時にはなんとか方をつける。これなら、渋谷で半年に一度行われている5000m記録会に間に合うかもしれない。大江戸線から半蔵門線に乗り換えて、渋谷からは小雨の降る中を走る。ぎりぎりかもしれないが、走っていけば、アップなしでもスタートできる。8時スタートのところを、7時50分に到着。楽勝である。